

科学する心が本物の技術を創る

—技術者としての自己実現のためにも—

顧問 本田 昭

“科学する心”とは私の作った新語ではない。

その昔(昭和20年)、当時の日本が欧米に比べて科学技術の面で大幅に遅れている現実に目覚めた時、もはや、これ迄の様に文字を通しての科学教育では、明日の日本はあり得ないとの発想から、教科書内容も実験観察を基本としたものに一新し、“科学する心を育てる”を標語にして理科教育を振興しようとした。(その考え方は今もって続いているのだが)

ところが残念なことに、昭和40年代に入ってから、なぜか子供達の思考から“科学する心”が離れていった。

その最大の理由は(推論するに)

- (1) 生活環境の便利さや刺激的情報の過飽和に伴って、子供の心から科学に対する好奇心や興味がうすれていったこと。
- (2) 受験社会(テスト中心)の波が、若者から科学する心の歓びを押し流してしまった。この2点にあると思うのだが、更にその状態は、彼等を迎え入れた理工系大学教育にまでも続くのである。私の独断と偏見で申し上げるなら、要するに、“科学する心を持って技術の本質に挑もうとする若者の姿”が見られなくなったことである。

確かに社会は変わった。

アナログからデジタルへ、ハードからソフトへ、実験からコンピュータシミュレーションへと。

かつて我々が頭で考え、手に汗をしばって製品を作った時代からみると、世の中は変わってしまった。

理工学離れは加速し、その一方“科学する心の歓び”を実感したことのない技術系の若者が増えて行く。

日本の技術がますます空洞化する中で、技術系企業のトップは、この所、急速に危機感を深め“技術者としての自己実現”(プロの技術者を目指して、自分の夢を自分で育てる)を盛んに呼び掛けるようになった。

働く者に夢を持たせる戦略、その第一歩は…

会社の将来に対して、また、自分自身の自己実現に対して夢を持つ事から始まると思う。

私自身にも技術コンサルタントとしての夢がある。

それは、次のような理念の下で若者を指導育成しようとする夢である。

即ち

- (1) 技術とは自然科学の土台の上に築き上げられた人間の英知の産物である。よって 科学を無視して技術は存在しないという自覚を持たせる。
- (2) 科学する心をもって、本物の技術に挑む情熱のある若者を育てる。
- (3) 理論の知的納得(数理の理解とは異なる)と、現実に則した実験による感動によって 科学する歓びを実感させる。

というものである。

何事も夢が夢で終わらないためには、執念と実行が前提である。

私は登山と音楽が生涯の趣味である。

科学技術の究明は一步一步の苦しい山登りであり、山頂での感動はブラームスの交響楽第一番の終楽章を聴く思いにも等しい。

感動あつての人生ではないだろうか！！

SANYO DENKI

Technical Report No.3

May 1997